

# 「顎骨成長の予測とコントロールは可能か」

九州大学大学院歯学研究院口腔保健推進学講座

教授 中島 昭彦

■ 略歴

昭和 44年	九州歯科大学卒業
44年	九州歯科大学院
46年	九州大学歯学部助手
51年	九州大学歯学部附属病院講師
平成 4年	九州大学歯学部（歯科矯正学講座）教授
12年	九州大学大学院歯学研究院教授



日本矯正歯科会（学術理事）、日本咀嚼学会（評議員）、日本顎変形症学会（評議員）、基礎歯科医学会、日本顎関節症学会、日本歯科保存学会、口腔外科学会、日本顔学会、米国矯正歯科会など。

## 顎骨成長の予測とコントロールは可能か

小児期の咬合誘導において、咬合異常が存在する口腔内に視点を置くだけではなく、歯列が乗ったベースすなわち顎骨の成長がどのように起こるかを予測して治療にあたるのが大切です。このようなことを小児歯科専門の先生方にお話することは、いわば釈迦に説法だと認識しています。しかし、予測が平均成長に基づいたものでよければ事は簡単ですが、問題となるのはその範囲を越えた症例です。もし小児歯科の先生のどこかに、とりえず咬合異常を治療してそのうち顎の成長に問題が出てきたら矯正専門医にお願いしよう、という考えがあるとするれば、それは長期間咬合誘導という名のもとに治療を受けてきた患者にとって幸せなことではありません。重要なのは患者それぞれの個成長、とくに正常範囲を超えた著しい成長があるかどうかを予測することだと思います。その予測は果たして可能でしょうか。個成長を予測するいとぐちはあるのでしょうか。

顔つきが血縁家族間で類似することは衆知の事実です。顎や咬合の成長発育も例外ではありません。親が反対咬合であれば子も反対咬合になりやすい傾向を持っています。これは多数の遺伝子が関与した、多因子遺伝によるものと考えられています。この形態遺伝学的背景、とくに親の顎顔面形態を参考に個人の顎の成長を予測できないだろうか、これは私達が成長期の患者の両親にお願いして、頭部エックス線規格写真（セファロ）や顔面規格写真、歯列模型などの形態検査をさせていただく理由です。咬合誘導は「歯並べ」の技術ではなく、患者の成長を見据えた長期的な咬合の管理にあるわけですから、診断にあたっては異常の原因が単なる環境要因によるものか、あるいは遺伝的背景で発症したと思われる場合、私達はそれに抗して何ができるかが次の問題となります。

ヒトの体は言うまでもなく遺伝と環境で決まります。そして顎の成長の多くは前者の要因が強く表れ、歯列・咬合は後者の影響を受けやすい領域と言えます。しがたって環境要因である咬合誘導や矯正治療は、その効果が及ぶ範囲は限られる事を考慮しておく必要があると考えます。本シンポジウムでは、親と子の形態分析から遺伝的要因の関与が強いと判断された小児期の反対咬合症例について、顎骨の成長予測の試みと反対咬合治療の限界について私見を述べたいと思います。皆様のご教授を仰ぐことができれば幸いです。